

# 人生の書『共産主義における「左翼」小児病』に学ぶ

第1回 四国ブロック

## ロシア革命の歴史的意義と背景

これから1年間四国ブロックが『共産主義における「左翼」小児病』をみんなで学習していきます。

今月号は須藤行彦労働大学長に、本テキスト採用の理由及び学習にあたっての問題意識の提起をお願いしました。

### 本書を講座学習に選んだ理由

まず、今回の講座で本テキストをやつていくことにした理由を述べたいと思います。

これまで四国でも、さまざま有名な古典のテキストを学習してきているところですが、この『共産主義における

「左翼」小児病』については、ずいぶん昔には学習したこともありまふ。今求められている運動は「大衆の中へ」

「大衆にまなぶ」という姿勢です。

このテキストはレーニンが社会主義者に対して書いた本ですが、私たち労働者が働き続け生き続けるなかで、あらゆる困難がある。そういう時にどういう態度をとるべきか。誰かに頼るのではなく、自分で判断していける能力をつくつていく。そういう意味で非常に教訓に満ちたテキストとして、タイトルも「人生の書」であるとしました。これをこれから一貫して学習すれば、皆さん展望を持ち、目が輝いた

労働者になるのではないか。人間的にもレベルが上がるのではないかと期待しています。そのような構えで今後1年間学習をすすめたと思います。

### 本書の問題意識 レーニンが求めた歴史的背景

それでは、早速本テキストの問題意識について話していきたいと思ひます。この書は、1920年7月19日から開かれたコミンテルン第2回大会に間に合うように、レーニンが執筆しました。その背景としてレーニンは、右翼

## ◆ みんなの学習講座

的な改良主義の考え方を、常に徹底的に反撃したわけですが、同時に、それと同じくらい痛烈に批判したのは「左翼」小児病、「左翼」冒険主義、すなわち、左翼的な日和見主義でした。

レーニンの考え方の土台には、「客観的な状態を正しく、正確に、冷静にとらえよ」という精神がいき渡っています。客観的な条件のないところで、主体的条件だけで、いかに主観的に活動しても、それは成功しないのだ、ということなのです。

レーニンは、あらゆる状況のもとで、大衆のあいだで活動し、あらゆる社会団体の中で、大衆がいるところでは、どこでも活動することが必要であると強調しました。

歴史をつくるのは人間です。だが個人ではなく、社会の大衆がつくるのです。大衆がどこに向って動くか、またどこに向って動くべき必然にあるかを認識することによって、初めて、私たちは歴史を理解するのです。

それぞれが状況に合わせて判断をし

なくてはならないということ。その上で社会を動かすためには、個人の頑張りには当然必要ですが、それが大衆になつて初めて力になるということです。

ロシア革命後、2、3年が経過したこの時期、革命をどう判断するかという意見がさまざまに分かれ、左右日和見主義が台頭してきました。そこでレーニンがこの書を書いたということなのです。

### ロシア革命の影響拡がる

1917年にロシア十月社会主義革命が起きましたが、それがヨーロッパをはじめ各国の社会主義政党、労働者階級に大きな影響を与え、革命の機運が盛り上がったのです。

革命は国際労働運動における新時代の端緒をひらき、植民地下にあつた人民の民族解放闘争、独立運動の発展に力強い影響を及ぼしました。

日本では、革命の報に驚きをもつて受け入れられたのですが、レーニンについて知っていた人はいなかったよう

で、山川均だけが第一インターの記録で知っていたそうです。ロシアの社会主義革命が、レーニンによって指導され、成功したということから、にわかにはレーニンに対する興味が強くなったものです。

1918（大正7）年の米騒動は、自然発生的な大衆の蜂起であつて、社会主義者はこれを指導することが出来なかつたのですが、間接的には、ロシア革命の影響があつたと考えられます。やはりロシアでの革命は世界的に大きな影響を及ぼしたということです。

### 妥協について

この「妥協」という問題については、このテキストの全体に一貫して流されているメッセージです。私たちは、「妥協なき闘争」「妥協を許さない」等と、勇ましく自分の主張の正しさを強調しがちですが、ある意味ではその人の弱さであつて、強さではないということなのです。

客観的な条件と主体的な条件によつては、妥協もありうるということを冷静に理解する必要があります。山川均さんが、三池労組に送った言葉の中に「敵と妥協する必要のないためには味方と妥協しなければならぬ。妥協することのできない原則をもつ者のみが大胆に必要な妥協をすることができる」というのがあります。

レーニンは、規律正しい、確固たる理論をもつた党をつくること、そうしてはじめて、必要な場合には正しい妥協をすることができると考えています。レーニンの言葉に「一歩行きすぎても真理は誤りにかわる」、「絶対に過ちをおかさないう人間は、何もしない人間である」というのがあります。日和見するの、やりすぎるのも同じように誤りであることを教訓化しています。

## ボリシエヴィズムへの成長

ロシア社会民主労働党第二回大会  
(1903年7月17日〜8月10日)

の最も重要な任務は、『イスクラ』によつて提起され、仕上げられた原則上および組織上の基礎の上に真の革命的労働者党をつくることにありました。

大会は、真にマルクス主義的な党綱領を採択しました。西ヨーロッパの社会民主党とは違つて、ロシア社会民主労働党は、当時は、プロレタリアートの独裁の思想をその綱領に定式化した世界でただ一つの労働者党でした。大会は、日和見主義とたたかい、マルクス主義を擁護し発展させ、党を建設する上で、『イスクラ』が果たした優れた功績を強調し、『イスクラ』を党の中央機関紙と宣言しました。

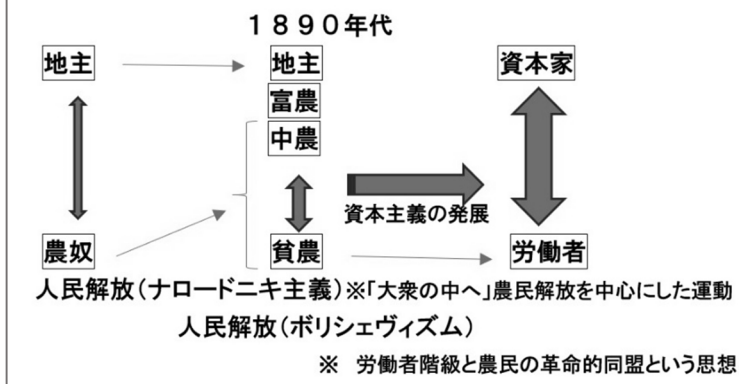
大会は、中央機関の問題についての評決で、党内におけるレーニンの原則の勝利を確保しました。この時以来、党の指導機関の選挙で多数を獲得したレーニン支持者は、ボリシエヴィキ(多数派)と呼ばれるようになり、レーニンの反対派は、メンシエヴィキ(少数派)と呼ばれるようになりました。大会でのたたかいの中から生まれ

た「ボリシエヴィキ」という言葉は、「労働者階級の事業、共産主義の事業にあくまでも献身的な、一貫した革命的マルクス主義者」という同じ意味になりました。

ここで、ロシアの当時の歴史の流れを図で説明します。封建社会でツァーリ政府下、農奴に支えられた地主が大きな力を発揮していました。農奴は悲惨な環境に置かれており、自然発生的に農民の人権・生活を何とかしたいという動きが生まれ・発展していきます。これが人民解放つまりナロードニキ主義という運動です。農民を解放し大衆の中へという考え方ですね。しかし、1890年代になると地主に加え、富農、中農、貧農というように農民のなかでも階層が生まれてきます。それまでは農奴と地主との対立だったものが、下層に置かれた貧農と地主・富農・中農との対立も生まれ激しさを増します。そうなるとなロードニキも一枚岩ではなくなり、革命的な勢力と富農・中農を支援する自由主義的な勢力に分かれ

## ◆ みんなの学習講座

### ● ロシア・ツァーリ政府下の資本主義の発展



ていくのです。  
資本主義社会はそれ以前から発達は  
していきませんが、1900年からの世

界的な大恐慌を受けて帝国主義段階へ、それとともに近代的労働者が増えていきます。急速に資本主義が発展していくなかで、ナロードニキ運動に代わり労働者階級のたたかいというものが前面に出てきて、次第に資本家という明確になった敵との組織的なたたかいに発展していきます。そして、それを指導したのがボリシェヴィズムであり、まだまだ80%を占めていた農民と労働者階級との革命のための同盟という思想のもとでの団結です。しかし、それに対してのツァーリ政府の弾圧は激しく、1897年にはレーニンもシベリアに流刑され、多くの社会主義者も弾圧されました。ツァーリ政府は封建的な君主制からブルジョア的な君主制にかけて大きく歴史が動いていったということです。

### 1905年、第一次ロシア革命

1904年1月に勃発した日露戦争は、ロシアの社会生活のすべての矛盾

を激しくし、革命的事件を促進しました。1905年1月9日の「血の日曜日」、夏には「戦艦ポチョムキンの反乱」等々、各地でストライキも起きました。この戦争の主因は、日本帝国主义とロシア帝国主义との利害の衝突でした。日本の支配階級は、朝鮮と満州を奪い、アジア大陸で地歩を固めようと狙っていました。

1905～1907年のロシアのブルジョア民主主義革命は、帝国主义時代の最初の人民革命でした。革命は、失敗に終わりましたが、ロシアのその後の発展全体に絶大な影響を及ぼしました。きわめて広範な人民大衆を意識的な革命的行動に立ちあがらせ、大きな政治的経験を積むことになりました。しかし、1907年から1910年には反革命、反動の時代に入り、労働運動や社会主義運動が抑え込まれていきます。「友だち」というものは不幸なときにかかる」「負けた軍隊はよくまなぶものである」は、その総括からの教訓です。

1917年

## 二月ブルジョア民主主義革命

1914年7月に始まった第一次世界大戦は、イギリス帝国主義者とドイツ帝国主義者の対立こそ、戦争の主因となったものでした。ドイツは、前世紀の終わりに工業発展の点でイギリスを追い越し、世界を自分に有利に、根本的な再分割を渴望していました。

ロシアの80%を超す農民、拡大してきた近代的労働者は、政治的な自由思想の自由も与えられなかったために非常に反逆的で一揆的なストライキも起きていました。

この戦争におけるボリシエヴィキ党の態度は、この戦争に対する闘争を大衆に呼びかけただけでなく、さらに、戦争によって生じる危機をツァーリズム打倒のために利用するよう呼びかけました。党の基本的なスローガンは、「帝国主義戦争を内乱に、支配階級にたいする革命に転化せよ」というものでした。

ボリシエヴィキは、人民に革命的政綱を示し、ツァーリズムを決定的に粉砕するよう大衆に呼びかけた唯一の党でした。ボリシエヴィキに激励された人民大衆の打撃を受けて、ロマノフ王朝の君主制は瓦解し、革命は勝利しました。

国内には臨時政府と労働者・兵士代表ソビエトの二重権力が樹立されました。ソビエトのエス・エル・メンシエヴィキ派指導部は、ブルジョアジーに権力を自発的に譲り渡したし、ブルジョア臨時政府を支持する義務をおいしました。二つの独裁、ブルジョアジーの独裁とプロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁とが、きわめて独特な形で見合うようになりました。

### レーニンの「四月テーゼ」

1917年4月、レーニンは『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』の報告を行いました（四月テーゼ）。このテーゼにはブル

ジョア民主主義革命を社会主義革命に成長・転化させる党の方針がたてられています。

「革命の基本問題は、権力の問題である。革命の鋒先がどの階級に向けられているか、どの階級の手が権力が移るか—この基本的な標識に基づいて、革命の性格が規定される。二月革命の結果、ロシアには二重権力が樹立されたが、歴史が教えているように、社会で敵対的な立場にある階級の二つの独裁が、長期にわたって並存することはできない。二重権力は、必ず、ブルジョアジーの独裁とプロレタリアートの独裁のどちらかに終わらざるを得ない。二重権力がどの独裁に終わるかを決めるものは、階級闘争である。」

レーニンは、ケレンスキー臨時政府を全く信頼せず、これをいっさい支持しないよう主張するとともに、大衆の闘争の先頭に立ち、この闘争を社会主義革命に向けよう、党に呼びかけました。

## ◆ みんなの学習講座

1917年、十月社会主義革命

「全権力をソビエトへ！」というスロージャーガンは、「二重権力をなくし、ソビエトの単独で全一の権力をうちたて、新しい型の国家を組織し、人民の上に立つ旧国家機構をなくし、ソビエトを土台にして、人民の利益に完全になかった新しい国家機構を上から下まで造り上げることを意味していました。

しかし問題は、社会主義革命というのは意識の高い人たちだけでやるのではないので、労働者大衆の中に浸透していかなければなりません。労働者大衆の心をつかむということ、それを組織化するということが、革命をおこなうのにもっとも重要なことです。このことは、革命遂行後、社会主義社会を建設していく過程でも必要なことで、労働者大衆を動かすことができなければ、社会主義建設は不可能です。

単なるイデオロギーの問題だけではなく、イデオロギーが、勤労大衆の運動となり、「物質的な力」になること

が大切です。

### 革命の勝因・国際的意義

- ① 十月社会主義革命が勝利した最も重要な原因は、その先頭にロシアの労働者階級が立っていたこと
- ② 搾取階級の抵抗を粉砕した社会勢力「プロレタリアートと農民の同盟」がロシアに創られたこと。
- ③ 十月革命が他の全ての革命と違う点は、労働者が自分の権力機関を創設したこと。
- ④ ロシアのブルジョアジーが革命の敵としては比較的弱かったこと。
- ⑤ 決定的な条件は、人民大衆の先頭に試練を経た、戦闘的・革命的なボリシエウイキ党が立っていたこと。

### 革命の客観的条件、主体的条件

レーニンは、すなわち、搾取され圧

迫された大衆がこれまで通りに生活することができないということを意識して変更を要求するというだけでは、革命にとつて不十分である、と語っています。革命にとつては、搾取者がこれまでのように生活し支配することができなくなる、ということが必要である。と、「下層」が古いものを望まず、「上層」がこれまでのようにやってゆけなくなつた場合にはじめて、そのときに革命は勝利することができる、と。

要するに、革命のためには、第一には、労働者の大多数が完全に変革の必要を理解し、この変革のためには死ぬことも拒まなくなること。第二には、支配階級が政府危機に陥り、この危機がもっとも遅れた大衆さえも政治に引き入れ、政府を弱らせ、革命党が政府をすみやかに倒すことができるようにすることが必要である、と強調しました。

学長ありがとうございました。次号は一章から三章までを学習します。